大高芭瑠子
Ōtaka Haruko

句集

# 朱夏

文學の森

船乗は一輪の薔薇残しけり

三叉路のいづれを行くも青岬

門柱に今つつがなし蝸牛

都庁ビルの二本の角や雲の峯

万巻の一書読みさし春の嫗

花疲れ長谷観音像膝下

うぐひすや山の心の切通し

洞窟より一家族出づ鳥曇

空耳は木霊に及び春の山

春の闇プラットホーム蹲る

植物園見きれず厚い躑躅の中

春宵のオルガン聖歌奏するよ

観覧車を降りて独りや春の雨

全山新緑その懐に鳥となる

不定愁訴鶯ホ・ホと鳴きて止む

左眼は良く見ゆ先づは蕗の薹

悪人のままに往生花の雨

雉子現はれ歩み過ぎれり我が荒庭

春昼や犬も並びし舟着場

平らなる心音とゐる春渚

貘は伏目に新涼の小動物園

文鳥の余命いくばく朝の月

首都よりの富士は横顔初嵐

颱風の眼や一島を捕へ澄む

本土といふ陸に住みつつ颱風待つ

きつつきの樹を打つ音も木霊かな

切りて飛ぶ爪に畳のある良夜

歯ぶらしの日毎に乾き秋に入る

飼猫のはたりと死んで菊日和

こぼれ萩マイナスイオンありますか

一膳の箸ころがるや春の雷

囀りに頭痛の因を忘れたる

啓蟄や鍼を打つ膚持ち合せ

春の山城暮るるに遅し暮れはじむ

薄墨桜支え柱も花色に

白酒の灯れる店へ走りけり

飲み代も霊水もある弥生かな

活断層よりそそり立ち二月

寒卵いま春眠のもみの中

この星に生まれ合はせて水芭蕉

古道より古墳新し芋嵐

力餅搗くは機械よ野分中

一日の徒労を思ふ茸飯

長き夜の避難梯子の綱の量

バックミラーに何も映らず星月夜

色鳥の声の始末は雨模様

裸眼には見えぬ火星を坂の上

秋灯の暗さの籠る古代布

秋まつり魚貝焼く燠浜に据ゑ

鵯の啄ばみ落す真赤な実

叫ぶ鳥永遠に叫ぶや遠霞

鶯のまだ鳴き下手や昼まで寝る

細き流れを小さく跳んで女涼し

一村は山を残しぬ芒山

わが庭に千両生えて実をつけし

陽炎や一段上り蔵へ錠

虹の根のあたりあの子の三輪車

地の果は立ちてゐる場所旱星

夏野の川跳び越したしや跳べよと声

古道より古墳新し芋嵐

句集　朱夏
2005 年 5 月 2 日　発行
著　者　　大高芭瑠子
発行者　　大山元利
発行所　　文學の森

PDF　俳誌の salon